

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 金 泰昊

金泰昊氏の博士学位請求論文『宣長の復原』は、国学の大成者といわれる本居宣長(1730-1801)について、そのもとのものに帰ろうとする思想のあり方(金氏は「復原」とよぶ)がいかに成立し、どんな様相・ニュアンスをもったかを解明する研究である。氏のいう「復原」は、国学にとって根本的な動機づけであるが、本論文は、その微妙なあり方をテキストに即して形成史的に辿るとともに、宣長の対抗する朱子学等の言説との関連において詳しく明らかにした。

本論文は、序論および5章からなっている。序論では、「復原」が宣長のみならず、中華文明・東アジア全体の課題であり、宣長は、中国におけるそのあり方を受け止めながら、これと差異づけし、また感情を強調しつつ、大御心へ随順する仕方で、固有性へと回帰する道を取っている、とする。以上の問題設定により、以下、形成過程に従って問題が追究される。第1章では、歌論・排蘆小舟稿本に「物のあはれ」論が姿を見せる過程を先行研究を参照しながら跡付け、歌論において、実情論が、詩や老荘など中国の言説とも対話しながら、風雅、さらにそのような空間(「国」)の定位を要請してくるとする。第2章では、宣長の実情論が、「ありのまま」さらに「うまれつき」を強調し、結局は「たちかへる」ものであること、その感動のあり方が中国の詩論と類似しながらも、作者の所属世界の自己同一性に回帰するもので、そのことによって、神に結びついていくものである、とする。第3章は、宣長の「物」が、認識主観を確保するよりは神道に結びつくもので、そのアオリスト的あり方が、翻訳不能性に逢着するものだと指摘する。第4章は、宣長の死後観に、「魂の留まり」の観念があり、これが無視し得ないものであること、篤胤にさらに展開されるものであることを述べる。第5章は、宣長の求めた「復原」、共存可能性が、現代にも問題提起するものである、とする。

以上の議論は、宣長の神話化に至る過程に深く踏み込み大筋としてよく跡づけたものといえる。原資料によく取り組み、研究についても日中西にわたり広く渉獵・参照している。日本の古典文を読み込みながらなおかつ中国のテキストと対比して宣長および東アジア思想を問う視点から問題提起を行っている点、また宣長の自己同一性を求める思想過程をテキストと関連づけ、たんなるイデオロギー化ではなく苦悩を含んだ実存的な過程として複雑微妙な様相をよく描き出しており、その理論的な切り口も斬新である点、そして宣長の死後観についてこれまで顧みられない面を見出し篤胤との関連に貴重な解釈可能性を開いた点、これらは高く評価できる。他方、主軸となる「復原」概念が無規定に広く用いられ、研究史との位置づけが、個々の本文ではあるものの、基本となる最初の場面設定において乏しい。この結果、後の国学・近代や中国との違い等の側面も把握が不十分である。宣長の政治的側面が一方向的に強調され、その学問や合理的な認識を開く面が見過ごされる傾向がある。これらは問題を残している。しかしにもかかわらず、全体としては宣長の政治化の過程を位置づける点で大きな成果をあげたものと認められ、審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいと判断した。